

総括：近代の歴史地理・再考

三木理史

本シンポジウムの特集号では、6編の充実した論考、各セッションに対する3編のコメント、そして総合コメントを収録した。

本シンポジウムは、1982年度の第25回大会の共同課題「近代の歴史地理」（その報告論文は『歴史地理学紀要25』に収録）を踏まえて企画された。オーガナイザーの1人である私は、本シンポジウムの総括として、前回の記録と当日の議論を対照させつつ、両者の相違点や本企画の残した課題を指摘した。

当日の総括において指摘した点は、(1) 近時代を対象とする歴史地理学研究の「同時代」的意義、(2) 「近代」の対象とする時期、(3) 地理学的地域スケール論との関係、であった。

まず、(1) に関わって『歴史地理学紀要25』の「序」において、浮田典良は、1950年代まで「歴史地理」とは近世以前の研究を自明とし、一方で自治体史における「近代」は地理学者に委ねられることが多かったと指摘している。しかし、そうした状況はもはや過去となり、いまや隣接諸学を含めて「歴史」を冠した諸研究が明治期以後を扱うのも当然となった。自治体史の「近代」はむしろ歴史研究者の領域となって、一方で歴史地理学者も先史以来のほとんどの時期を分担する場合が増えてきた。歴史地理学において「近代」が市民権を得たことは疑いないが、それにづく第二次世界大戦後のより「同時代」性の強い「現代」はどうであろうか。「現代」については、いわゆる一般系統地理学との境界の点で、地理学内部での見解に相違が残り、

今後議論を重ねる必要がある。

つぎに(2)「近代」の対象時期は、当日の議論で明治期から昭和戦前期とする通説を概ね踏襲していた。総合討論では、そうした通説的「近代」に関しての歴史地理学のスタンスを議論してもよかったと感じた。管見の範囲の経済史では、もはや近代日本の起点を、政治変革としての明治維新ではなく、通商関係に変革をもたらした幕末開港期に求めることが多いように思われる。また、社会史の隆盛を反映し、その終着点も第二次世界大戦終戦より、都市問題の顕在化してきた両大戦間期の1920年代に置く見解もある。それは、当日の阿部和俊による近代都市システムの変革期が1920年代とする指摘とも符合する。また、1945年体制論などの戦時一戦後連続論を踏まえても、もはや第二次世界大戦終戦を「近代」の終着点とする必然性は乏しい。

さらに(3) 地理学的地域スケール論については、黒崎千晴「解題にかえて」（『歴史地理学紀要25』）の稿末では、空間規模の広狭に関する議論が意外に少ないと指摘され、「近代」における一般市民の生活空間拡大の意味を問う必要が次期に期待されていた。マクロメソミクロの各地域スケールをズームレンズのごとく活用できる地理学こそが、それに取り組むにふさわしい分野であることは疑いない。しかし、残念ながら当日はそうした議論を喚起できないまま、30年来の課題をさらに積み残すことになってしまった。

(奈良大学)